

形象化された視点

——ヘルダーリンの詩作品から——

海老原 由美子

ヘルダーリンの詩の独自性について考えるとき、一つの手がかりを与えてくれるのが、ガルディニーの試みた「流れ」(Strom)を扱った二つの詩の、すなわち《Der Rhein》と同時代の代表的詩人ゲーテの《Mahomets Gesang》との比較である⁽⁴⁾。それによると、ゲーテは人間の生の「道程」(Weg)に近い意味での「象徴」(Symbol)としてのStromを創り出しているが、一方ヘルダーリンは「自然物そのもの」(das Naturding Selbst)のStromをまさに見て、そこに「存在の像」(Bild des Daseins)を、すなわち「神的現実」(eine numinose Wirklichkeit)を見ているという。言い換えるなら、詩人の体験を語るのではなく、描かれる風景そのものが神的な存在の意味を伴っているというヘルダーリンの詩の一つの特徴が指摘されているのである。

ところで、その風景となっている対象に注目すると、それは独特の視点からみつめられているのが解る。たとえば、ヘルダーリンの詩人として最晩年の作品で対象と詩人の関係について深く考えさせられる《Hälfte des Lebens》の場合をみてみよう。

Hälfte des Lebens
 Mit gelben Birnen hängt
 Und voll mit wilden Rosen
 Das Land in den See,
 Ihr holden Schwäne,
 Und trunken von Küssen

生のなかば
 梨は黄に熟し
 野薔薇は咲きあふれ
 地は湖におちる、
 やさしい白鳥らよ、
 おまえたちもくちづけに陶醉して

Tunkt ihr das Haupt	こうべをひたす
Ins heilignüchterne Wasser.	清く静かな水に。
Weh mir, wo nehm' ich, wenn	ああ 悲しい、いずこで
Es Winter ist, die Blumen, und wo	花を摘もう、冬がくれば、ああ いずこで
Den Sonnenschein,	陽の光を
Und Schatten der Erde?	地の蔭を。
Die Mauern stehn	言葉なく冷たく
Sprachlos und kalt, im Winde	壁は立つ、風に
Klirren die Fahnen.	風見はきりきりときしむ。

「ここには暗示や含意はなく、すべては明示である」⁶⁾と手塚氏がその著書『ヘルダーリン』で述べているように、この詩はさまざまな形象によって直接に読者に訴えかけてくる。この詩が一層悲痛な詩人の声なき叫びを伝えるのは、手塚氏の同著における見解による以下のような詩の特徴があるからではないか。すなわち、ヘルダーリンの詩には詩人が対象から隔たっていて、その対象を遙か遠くに見る趣があり、詩人と対象との関係が一見直接的と思われるこの詩においても、決して詩人は自らには遠い世の常の日常的な生の営みに目を向けたのではない。第1節においても対象と詩人は密着しておらず、深く閉ざされた密室の暗さを通じてみられた外景のように遠くに隔たっている。そして第2節はその密室の暗さそのものに他ならない⁶⁾。このような対象との隔絶した風景と平行して、これとほぼ同時期の詩作をはじめ一連の詩の中で、ヘルダーリンの詩作における視点を示すと思われる契機が形象化されているのがひとときわ目を惹く。その具体例をあげるなら、1801年《Wie wenn am Feiertage …》を皮切りに、ヘルダーリンが詩を展開していった詩形式「自由韻律讃歌」(Hymnen in freien Rhythmen)によって書かれた詩のひとつ《Patmos》は、詩人と対象との関わりを鳥の飛翔の形象によって明瞭に示しているのである。それは鳥の形象によって直接的に表現されるのではなく、飛翔してゆく詩人が目のあたりにする風景の変化を描くことによって、鮮烈な印象を刻んでいる。

(ホンブルク公に献呈された稿による)

.....
So gieb unschuldig Wasser,	さあ無垢な水の流れを、
O Fittige gieb uns, treuesten Sinns	おお 翼を私たちに与えよ、真にあふれる心で
Hinüberzugehn und wiederzukehren.	かなたへ赴き こなたへ帰るために。
So sprach ich, da entführte	そう語りかけたとき、
Mich schneller, denn ich vermuthet,	予期せぬ程に速く
Und weit, wohin ich nimmer	かつて思いもよらなかった
Zu kommen gedacht, ein Genius mich	遠くの地へ、精霊がわたしを
Vom eigenen Hauß'. Es dämmerten	わが家から誘ったのだ。すすむにつれ
Im Zwielight, da ich gieng	薄明のなかに現われたのは
Der schattige Wald	故郷の
Und die sehnsüchtigen Bäche	蔭ふかい森と憧憬にみちた幾多の小川。
Der Heimath; nimmer kann' ich die	すぎゆく国々をわたしは知らなかった。
Länder;	
Doch bald, in frischem Glanze,	しかし、やがて鮮やかに輝き、
Geheimnißvoll	神秘に満ちて
Im goldenen Rauche, blühte	金色の霞のなかに、花開いたのは
Schnellaufgewachsen,	太陽の歩みを持って、
Mit Schritten der Sonne,	幾千の頂を香らせて、
Mit tausend Gipfeln duftend,	すばやく生いたった
Mir Asia auf,	アジアであった、.....

第1節第6詩行の「鷲」(Adler)の形象を詩人自身が受け継いでいる。„O Fittige gieb uns“と呼びかけた詩人は翼を得て飛び立ち、故郷(ドイツ)からアジアへと渡る。対象を遙かに、しかし、しかと見つめている、鳥と化した詩人の姿がここにある。後に、ホンブルク二つ折ノートの中の《Das Nächste Beste》という詩の断片において、ヘルダーリンは「鳥」(Vögel)について次のように歌っている。

Denn immer halten die (die Staren) sich genau an das Nächste,
 Sehn sie die heiligen Wälder und die Flamme, blühendduftend
 Des Wachstums und die Wolken des Gesanges fern und athmen Othem
 Der Gesänge. Menschlich ist
 Das Erkenntniß. Aber die Himmlischen
 Auch haben solches mit sich, und des Morgens beobachten
 Die Stunden und des Abends die Vögel....

なぜなら椋鳥らは常に最も身近なものをまさしく握りどころに、
 聖なる森を、花香る生長の
 炎を、歌の雲を遙かに見て、歌の息吹きを
 呼吸するから。認識は
 人間の業である。しかし天上のものらも
 それを身にそなえ、鳥は
 朝に夕べに時刻を守る。

天上のものたちの代表として、身近なものを見誤ることなく、地上の人間たちの認識を持つという鳥の視点を考察の焦点にするならば、ヘルダーリンが対象をどのように見ているのか、そして対象との隔絶が何を意味しているのか、が明らかになってくるのではないか。ガルディニーは「ヘルダーリンの生は見られたものの中に引き入れられる……ヘルダーリンの詩は Vision の深みから生まれたものである」と述べている⁽⁴⁾。この《Patmos》も例外ではない。日本語版全集においてはこの第2節以降の鳥の飛翔の形象は詩人の Vision の展開と解釈されている⁽⁵⁾。我々には Vision 以外の何ものでもないこの鳥の飛翔の形象を手がかりに、詩作における視点という問題に即してヘルダーリンの詩作品の独自性を探っていきたい。

鳥の飛翔の形象は、早くからヘルダーリンの詩に現われている。フランクフルト時代の1797年に書かれた《An den Aether》は、ヘルダーリンを育てた「父なるエーテル」(Vater Aether)に捧げられた詩である。この詩の第5節において、詩人は、Vögelを「エーテルの愛し子」(des Aethers Lieblinge)

と呼ぶ。そして、植物や魚、獣、馬そして鹿など、大地に囚われている存在ながらも、今まさに大地から飛び立とうとしている生物と同様に自らの心も飛びたい、そしてすばやく飛ぶ大鷲に、次のように呼び掛けたいのだ、と歌う。

Daß er, wie einst in die Arme des Zeus den seeligen Knaben,
Aus der Gefangenschaft in des Aethers Halle mich trage.

かつてツォイスの両腕へと至福の少年を運んだように
この囚われの地上からわたしをエーテルの堂へみちびけ。

しかし、詩人は飛び立つことができない。続く第6節はその理由を歌っている。

Töricht treiben wir uns umher; wie die irrende Rebe,
Wenn ihr der Stab gebricht, woran zum Himmel sie aufwächst,
Breiten wir über dem Boden uns aus und suchen und wandern
Durch die Zonen der Erd', o Vater Aether! vergebens,
Denn es treibt uns die Lust in deinen Gärten zu wohnen.

おろかにも私たちは徘徊する。空に向かって伸びようとして
支えの棒が折れてしまった、あてなく迷う葡萄の木のように、
地面をおおい横ひろがりにいたずらに求めさまよう
地上の幾多の垣根を越えて、おお 父なるエーテルよ。
なぜならあなたの庭に住むよろこびが私たちを駆り立てるから。

天上へと飛翔したい思いと、父エーテルの庭であるこの大地に惹きつけられている思いとの激しいぶつかり合いが、鳥という存在への呼びかけという形をとっている。詩ではないが、同じフランクフルト時代を通じて書かれた《Hyperion》第2巻で、ディオティーマが次のように語っていることを考え合わせると、この詩想の背後には、天上へと飛び立ってしまった後に我が身に引き受けなければならない、地上の宿命への詩人の深い洞察があると考えられる。

…… Eine Kraft im Geiste, vor der ich erschrak, ein innres Leben, vor dem

das Leben der Erd erlaßt' und schwand, wie Nachtlampen im Morgenrot ……
Aber hast du sie fliegen gelehrt, warum lehrst du meine Seele nicht auch, dir
wiederzukehren? Hast du das ätherliebende Feuer angezündet, warum hütetest
du mir es nicht? …… Du entzogst mein Leben der Erde, du hättest auch
Macht gehabt, mich an die Erde zu fesseln, ……⁽⁶⁾

私自身ぎくりとした精神の力、それは正に内なる生命でした、その前では地上の生は
色あせ消えてしまいました、朝の光の中に灯ったままの夜のランプのように。……け
れど、あなたが私の魂に翔ぶことを教えてくださったのに、なぜあなたのもとへ帰る
ことも教えて下さらないのですか。あなたがエーテルを愛する火を点したのに、なぜ
私の火を守っては下さらないのですか。……あなたは大地から私の生を取り上げた、
そのあなたなら私をこの大地に縛りつける力を持っていたでしょうに、……

飛び立つことの危険を認識する—これはつまり大地とのあまりの隔絶の認識
に他ならない—という過程を経て、詩人の飛翔する鳥への接近はむしろ積極的
なものになってゆく。1801年に成立したであろうといわれる《Germanien》に
おいて、ギリシャを去り故国にとどまる決意を歌った後、過ぎ去っていった神
々の地 Orient を見はるかす詩人は、父エーテルから使者がおくられてくるの
を見る。

Vom Aether aber fällt
Das treue Bild und Göttersprüche regnen
Unzählbare von ihm, und es tönt im innersten Haine.
Und der Adler, der vom Indus kömmt,
Und über des Parnassos
Beschneite Gipfel fliegt, hoch über den Opferhügeln
Italias, und frohe Beute sucht
Dem Vater, nicht wie sonst, geübter im Fluge
Der Alte, jauchzend überschwingt er
Zuletzt die Alpen und sieht die vielgearteten Länder.

なんとエーテルからは
真の形象と数えきれぬ神々の言葉が
降り注ぎ、聖なる森の奥に響きわたる。
おおインドゥスから飛来して、

鷲はパルナッソスの
 白い頂を、イタリアの犠牲の丘を
 高々と越え、父のために喜ばしい獲物を
 探している、昔とは異なり、翔ぶことに熟達した
 あの老いたる鳥は、歓声をあげながらついには
 アルプスを越えてこの多様な国々を見はるかす。

詩人は、使者 Adler がインドゥス河からパナルッソス山、イタリア、アルプスを越えて故郷に至る道を追う。バイスナーが述べているように、これは神的存在の啓示が東から西へとなされる道筋である⁹⁾。というのも、使者の使命は、神の娘ゲルマニア („Die Priesterin, die stillste Tochter Gottes“) を捜し神の言葉を伝えることに他ならないから。詩人はここで自ら次のようにその言葉を歌う。

O trinke Morgenlüfte,
 Bis daß du offen bist,
 Und nenne, was vor Augen dir ist,
 ……

O nenne Tochter du der heiligen Erd'
 Einmal die Mutter. Es rauschen die Wasser am Fels
 Und Wetter im Wald und bei dem Nahmen derselben
 Tönt auf aus alter Zeit Vergangengöttliches wieder.

おお朝の大気を飲み干せ、
 おまえが開かれたものとなるまで、
 そして目のあたりにするものを名づけよ、
 ……

おお名づけよ、聖なる大地の娘よ、
 さあこの母を。水の流れは岩に轟き
 嵐は森にどよめく、それらの名を呼ぶとき
 古の時代から過ぎ去った神性が再び響きはじめる。

父エーテルの娘であって、母大地の娘であるゲルマニアに対し、「過ぎ去った神性」(Vergangengöttliches)を再び響かせるように、という委託がなされているのだ。これは、ノヴァーリスの『キリスト教世界またはヨーロッパ』(1799)やシラーの『ドイツの偉大さ』(1797年の詩の草案—印刷は1871年)の場合と同様に、フランス革命とそれに続く混乱した状況とドイツの政治的貧困という現実の只中で、内面的、精神的な領域において自国の価値を確証することに、未来のドイツがなすべき使命を見出そうとするヘルダーリンの意志である。そして、Adler が語る言葉である第4節第14詩行から詩の終わりまで3詩節余り(50詩行)には、Adler がゲルマニアに告げる言葉そのものを歌う「ピンドロスの手法」が使われている⁶⁾。この手法によって、詩人はすでに「昔とは異なり、翔ぶことに熟達した／あの老いたる鳥」Adler そのものとなってゲルマニア(ドイツ)に対し告げられた神の言葉を伝えているのである。鳥の飛翔の形象と詩人自身との見事な同化がなされているばかりでなく、さらに新たな展開を迎えているのが《Patmos》である。冒頭を引用する。

Nah ist	近くになって
Und schwer zu fassen der Gott.	しかも神はとらえがたい。
Wo aber Gefahr ist, wächst	しかし危険のあるところには、救いも
Das Rettende auch.	また育つ。
Im Finstern wohnen	暗やみに驚は
Die Adler und furchtlos gehn	棲み 恐れもなく
Die Söhne der Alpen über den	アルプスの子らは軽やかに懸けられた橋を
Abgrund weg	行き
Auf leichtgebauten Brücken.	深淵を克服する。
Drum, da gehäuft sind rings	あたりをみれば、時の峰々が輪をなし
Die Gipfel der Zeit, und die Liebsten	積み重なり、愛するものらも
Nah wohnen, ermattend auf	近くに住むが、あまりに隔てられた
Getrenntesten Bergen,	山々にあり疲れている、
So gieb unschuldig Wasser,	さあ無垢な水の流れを、
O Fittige gieb uns, treuesten Sinns	おお 翼を私たちに与えよ、真にあふれる心で
Hinüberzugehen und wiederzukehren.	かなたへ赴き かなたへ帰るために。

„O Fittige gieb uns“ と呼びかける 詩人が求めるのは、「かなたへ行き」(hinübergehen)、「再び帰ってくる」(wiederkehren) ための翼である。大地(ドイツ)を飛び立ち、再び大地(ドイツ)へと帰る、言い換えれば、飛行の意味を自覚した意識の翼であり、これは天上と大地の間の自由な往来を可能にするといってもよいだろう。そして、第2節において、詩人は「精霊」(ein Genius)によって我が家から誘われる。大きな力によって詩人に翼が与えられる。この翼には「救いとなるもの」(das Rettende)に他ならない、隔離されたアルプスの子らを結ぶアルプスに架けられた橋、暗闇に棲む強大な翼を持った鷲、そして時の峰々を結びつける川、と同じ「結びあわせ、宥和する」(verbinden und versöhnen) という意味が与えられている、とバイスナーは解している⁶⁾。ここにおいては、《Germanien》の Adler の飛行とは正反対の方角へ向かって、いま、まさに「救いとなるもの」(das Rettende) という意義を担った Adler の飛行が始まったのである。目に見えるのは、故郷の自然、見知らぬ国々、そしてアジア、その神々しい宮殿、海、さらに不慣れたそれらの中で、唯一詩人が知っているパトモスという島である。

Doch kennt die Inseln der Schiffer.	けれど船乗りは島々を知りぬいている。
Und da ich hörte	そしてとうとう
Der nahegelegenen eine	あの近くに横たわるひとつの島が
Sei Patmos,	パトモス、と耳にした時
Verlangte mich sehr,	たまらず、そこに
Dort einzukehren und dort	立ち寄りそこで
Der dunkeln Grotte zu nahn.	あの暗い洞窟を訪ねたいと願った。

詩人の視点と Adler の視点とは一つになり、渡り鳥が安息の地に羽を休めるように、詩人も宥和する力で「時の峰々」(die Gipfel der Zeit)を結び、再び神を把え得るものとするために「立ち寄る」(einkehren)のである。そして詩人は、地上に起こったひとつの出来事について、すなわち、イエス・キリストの死について語りはじめるのである。

詩人が見続けたものは、常に大地であった。それは詩句としても《Patmos》と同じところに起案された《Der Einzige》第1稿の最終句において明確に歌われている。

Die Dichter müssen auch	詩人、この精神の人々もまた
Die geistigen weltlich seyn.	この世のものでなくてはならぬ。

そして、同じく《Der Einzige》第3稿においては、大地と天上とが一体をなすというヘルダーリンの世界観が示される。

…… Himmlische sind
Und Menschen auf Erden beieinander die ganze Zeit.

天上のものらと
地上の人々はつねに共にある。

この詩想は《Der Ister》において、Strom が昼には太陽を、夜には月を映して天上と大地をひきはなし難いものとし、Strom によって「至高の者」(der Höchste) がこの大地へ下ってくるときに、天上と大地との融合へと展開する。さらに、まとまった讃歌作品の最後のものといわれる、題名そのものが天上と大地との懐胎をしめす《Mnemosyne》(Tochter des Himmels und der Erde) という言葉が記されているのである。

天上と地上の間を飛ぶ鳥の形象と視点を我々は取り上げてきたが、それはヘルダーリンにとって単なる自分の姿の投影ではなく、むしろひとつの「存在」であり、自分の姿そのものであった。その視点からヘルダーリンが見た風景は、《Germanien》のそれにしても、あるいは《Patmos》のそれにしても、地上に自らを呪縛し天上を見ることをしない者がとうてい見ることのできないものであり、さらに、ヘルダーリンにとって見ることは、まさに、そのような者が見ることとは異なり、彼が「見られたものなかへ引き入れられる」こと

に他ならないのである。そして、彼がそれらに引き入れられるとき、それらは彼に天上から遠ざかる人間のあり様と同時に神的な存在を開示したに違いない。ヘルダーリンはそれを受け取り、言葉としたのだ。ここからヘルダーリンの Vision は発していると考えられる。決して一個の芸術作品ではなく、ガルディーニの定義した「宗教的な委託の意識」(ein religiöses Auftragsbewußtsein)⁶⁰によって、すなわち、人間と神的存在との関わりという本来の意味において「宗教的」(religiös)という言葉でしか表現しえない経験によって書かれたところに、この詩人の後期の詩の一つの独自性が現われていると考えられるのである。ヘルダーリンにとって天上と地上は実在する世界、神々と人々との生命ある世界であったのである。ヘルダーリンの詩は、天と地との非常な隔絶の意識から、両者の融合を歌いあげる意志の方向へと移っていくのであるが、それは理想への飛翔ではない。なぜなら、その確固とした意志の裏側には、決して到達できないという不可能性の認識が暗やみとなって存在していると考えられるからである。長大な讃歌群と平行して書かれた冒頭でも挙げた《Hälfte des Lebens》における詩人と対象との隔絶とは、すべての対象に拒絶されていくという、この意志の背後にある絶望を意味しているのではないだろうか。おそらく古代ギリシャにおいてヘルダーリン自らが見出したと信じたこのような視点に立つことは、現代に生きる我々にとっては無論のこと、彼が詩人として生きた18世紀末から19世紀初頭においてすでに人間にとって最も困難な仕事の一つであったと思われる。

注

- (1) Guardini, R.; Hölderlin. Weltbild und Frömmigkeit. 3. Aufl., München: Kösel, 1980. S. 28~S. 33 に詳しい
- (2) 手塚富雄 『ヘルダーリン 下』(中央公論社, 昭和60年) S. 313
- (3) 手塚富雄 前掲書 S. 314~S. 315
- (4) Guardini, a. a. O., S. 33
„Sein eigenes Leben wird in das Geschaute hineingezogen....“

So entspringt Hölderlins Dichtung zutiefst der Vision.“

- (5) 『ヘルダーリン全集 II』第7版 (河出書房新社, 昭和55年) S. 219 下段注釈
- (6) Hyperion II, Zweites Buch
Hölderlin Werke und Briefe I, Hg. von Friedrich Beißner und Jochen Schmidt,
Frankfurt am Main: Insel Verlag, 1969. S. 425～S. 427
- (7) ditto, Erläuterungen S. 89
- (8) ピンダロスの手法について, またノヴァーリスとシラーの各作品については手塚富雄『ヘルダーリン 下』S. 242～S. 248に述べられている。
- (9) Beißner, a. a. O., Erläuterungen S. 111
- (10) Guardini, a. a. O., S. 30

詩および『ヒュペリオン』の翻訳に当たっては, 河出書房新社版『ヘルダーリン全集 I～IV』を参考にした。

ヘルダーリンの詩の原典は以下から引用した。

Sämtliche Werke (Große Stuttgarter Ausgabe), Hg. von Friedrich Beißner. 8 Bde.
Stuttgart 1946-1985